けんぽく

ふくしまから はじめよう。
Future From Fukushima.

平成28年5月31日発行

「食」と「ふるさと」新生運動ニュース

第30号[平成28年5月号]

編集・発行　福島県県北農林事務所

県北地方の「食」と「ふるさと」新生運動に関する情報をお知らせします。

◆ふくしま未来農業協同組合があんぽ柿6次化新商品を当農林事務所長に贈呈！

平成 28 年５月 25 日（水）、当農林事務所所長室において、ふくしま未来農業協同組合　安彦慶一代表理事専務、数又清市常務理事、同農業協同組合あんぽ柿振興センターの芳賀武志センター長、深谷香織氏が来所され、あんぽ柿を使用した６次化新商品４品を贈呈されました。

左より安彦代表理事専務、水戸当農林事務所長、深谷さん、数又常務理事

新商品は、「柿入れどき（リキュール）」、「柿入れあんぽ羊かん」、「Kaki 入れフィナンシェ」、「Kaki 入れタルト」で、平成 28 年２月に発売された第１弾の和洋菓子７品に次ぐものです。柿のリキュールを始め、定番の和菓子、フランス発祥の伝統菓子をもとにした洋菓子等バラエティーに富んだラインナップです。

「リキュール」（ケース左）、羊かん（ケース中央）、「フィナンシェ」「タルト」（ケース右）

伊達地方のあんぽ柿については、原発事故により加工自粛をした期間もありましたが、加工再開モデル地区の設定や全量非破壊検査の実施など関係者の努力により３年前から生産・出荷が再開されました。昨年度は加工再開モデル地区の拡大により生産・出荷量が増加するなど、震災前の水準に近づいております。これらの商品が更なるあんぽ柿の消費拡大につながるよう、当農林事務所としても今後もＰＲ等を通して支援をしてまいります。

御紹介したあんぽ柿６次化新商品は、ふくしま未来農業協同組合ファーマーズマーケット みらい百彩館「んめ～べ」において、５月 28 日（土）より販売されます。ぜひ 90 年の伝統のあるあんぽ柿を使用した６次化商品の新たな風味と食感をお楽しみください。

（企画部）

◆平成 28 年度　新規就農者激励会が開催されました！

平成 28 年４月 26 日（火）、福島市のＭＡＸふくしま４階Ａ・Ｏ・Ｚ（アオウゼ）において、「平成 28 年度　新規就農者激励会」（福島市、ふくしま未来農業協同組合主催、福島市農業後継者連絡協議会共催）が開催されました。当日は、新規就農者 15 名がこれからの抱負を語り、集まった福島市の農業後継者組織のメンバーや関係機関から激励を受けました。

１人１人熱く抱負を語る新規就農者

新規就農者の経歴は、家族でＵターンしてきた方、夫婦で農業を始める方、会社勤めをしていた方、県の農業総合センター農業短期大学校の卒業生、同センター果樹研究所の講習生だった方など様々です。経営内容も果樹を始め、野菜、花き等多彩で、酪農経営を行う法人へ就農した方もいます。

激励会に出席した新規就農者の皆様

農業者の高齢化が進み、担い手不足が叫ばれる中、ここ数年福島市の新規就農者は増加傾向にあります。今年度は昭和 55 年以来、36 年ぶりに 30 名の大台に達しました。

今後は、新規就農者の早期の経営安定と着実な定着を目指し、関係機関、農業者全員で応援し、皆で福島の農業を盛り上げていきます。

（農業振興普及部）

◆無加温半促成きゅうりが収穫最盛期を迎えています！ ～周年出荷の産地“福島地区のきゅうり”～

福島県は“日本一の夏秋きゅうり”で有名ですが、県北地域では、福島市東部地区（鎌田、岡部）を中心に施設栽培が行われており、きゅうりが周年出荷されています。

現在は、無加温半促成の作型が収穫最盛期を迎えており、新鮮なきゅうりが毎日生産者によって収穫されています。収穫後、箱詰めされたきゅうりは、京浜市場に８割、県内に２割が出荷され、消費者へ届けられています。

当地区は古くからの産地ですが、新しい取組も行われており、平成 27 年には、集出荷施設が整備され、予冷施設の利用により鮮度保持が図られています。また、光合成を効率よく促進させて生産量アップにつなげるために、炭酸ガスの日中施用技術の導入が始まりました。平成 28 年４月 26 日（火）には炭酸ガス施用勉強会を生産者及び農業協同組合などの関係機関とともに実施し、５月２日（月）には同じ技術を導入している須賀川地域の生産者と交流を行うなど、産地のパワーアップに向けた取組が行われています。

収穫開始時期のきゅうり

鮮度パックに入れて、箱詰めされたきゅうり

収量アップに向けた炭酸ガス施用勉強会

（農業振興普及部）

◆平成 28 年度「田んぼの学校」開校式及び田植えが行われました！

平成 28 年５月 19 日（木）、福島市の福島市立飯野小学校敷地内水田において、平成 28 年度「田んぼの学校」開校式と田植えが行われました。

この事業は県の「ふくしまの農育」推進事業を活用して、昨年度から３年間にわたって実施されるもので、今年度はその２年目に当たります。当日は５年生 22 名が参加しました。

水戸当農林事務所長の挨拶

開校式では、地元農家である田んぼの学校長　高野久氏、飯野小学校長や当農林事務所長が挨拶し、『「食べ物・いのちの大切さ」や「自然の大切さ」、「地域とのつながり」について学んでほしい』との話がありました。

その後、高野氏から苗の植え方について説明が行われた後、児童たちは裸足になり、２つのグループに分かれて田んぼの両端から苗を植え始めました。

ほとんどの児童が初めての田植え

児童のほとんどは田植えが初めてということもあり、田んぼの中での移動や、植えた苗が倒れないようにするのに悪戦苦闘していました。

しかし、田植えを終えた後の児童たちは達成感に溢れており、「田んぼの中に入ると最初はぬるぬるして気持ち悪かったが、楽しかった」「見るのとやるのでは違っていた」「みんなで協力してできて良かった」などの感想が聞かれました。

田んぼの学校長講評

最後に、児童たちが先生や「田んぼ」に「ありがとうございました」と御礼の言葉を伝えて閉会しました。

（農村整備部）

◆国見小学校児童が「天のつぶ」の田植えを行いました！

平成28年５月６日（金）、国見町立国見小学校の学習田において、５年生73名が県の水稲奨励品種「天のつぶ」の田植えを行いました。

一列に並んで田植えをする児童たち

田植えは、「地域を知る、農業への理解を深める」ことを目的として小学校が企画し、小坂アグリ株式会社と国見町の協力により実施されました。また、ふくしま未来農業協同組合伊達地区本部国見営農センターと当農林事務所伊達普及所の職員も指導のために参加しました。

児童たちは、「天のつぶ」の名前の由来や苗の植え方等の説明を受けた後、一列に並んで田植えをしました。最初は、裸足で田んぼに入ることをためらう児童もいましたが、しばらくして慣れてくると、皆上手に苗を植えていました。

児童たちと質問に答える小坂アグリ㈱
朽木代表取締役（中央右）

田植え後、児童からは、「田んぼ」や「お米」についての質問がありました。対応した小坂アグリ株式会社　朽木勝之代表取締役は、「子どもたちには地域の農業や米作り、そして『天のつぶ』をもっと知ってもらいたい」と話していました。

秋には、学習田の稲刈り体験と収穫祭が予定されています。

（伊達農業普及所）

◆二本松市東和地区における「栽培」わらびの取組が始まりました！

平成 28 年４月５日（火）、二本松市東和地区において、「栽培」わらびの作付け拡大に向けて、わらび苗を園芸用バットへ植え付ける作業が行われました。

バットから徐々に萌芽し始めたわらび

震災以前、春先の直売所の主役はわらび等の山採り山菜類でした。しかし、原発事故以降、放射性物質の影響により二本松市産「野生」わらびに対して国により出荷制限が出され、直売所等への出荷ができない状況が続いています。

このような状況の中、平成 27 年冬ごろから「地場産わらびの復活を目指そう！」という気運が地域で高まり、平成 28 年２月に、特定非営利活動法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会が中心となり山菜研究会を立ち上げ、「栽培」による地場産わらびの復活と産地再生を目指すことになりました。

「栽培」わらびに取り組む課題は、多量のわらび苗の確保と除草の手間にあります。そこで、従来の植付方法とは異なる、山形県が開発した早期成園化技術に注目し、バットで効率的に増殖させた元苗か

らポット苗を育成した後に、マルチ栽培を組合わせることで除草管理の省力化を目指しています。

現在、バットに植え付けたわらび苗は徐々に萌芽し、力強く根付き始めています。わらびの本格出荷は早くても３年後ですが、今後も地域の皆様の心意気とともに取組の経過をお伝えしていきます。

萌芽したわらび

（森林林業部・安達農業普及所）

◆大玉村で田植えツアーが行われました！

平成 28 年５月 21 日（土）、大玉村大山において、首都圏で展開する「スーパーいなげや」主催の田植えツアーが、ふくしま未来農業協同組合の協賛で行われました。

当日は、抽選で選ばれた「スーパーいなげや」の利用者 30 名・10 家族がツアーに参加しました。参加者は昼過ぎにバスで会場の大山公民館に到着しました。始めの歓迎セレモニーでは、ふくしま未来農業協同組合安達地区稲作部　伊藤一男部会長、同農業協同組合　菅野徳一朗安達地区担当常務理事、いなげや商品部　高島政治氏から歓迎の挨拶が行われました。その後、集合写真を撮影し、着替えをした後、昼食となりました。昼食には、中通り特Ａ米のコシヒカリで作ったおにぎりや、アスパラの天ぷらなどが振る舞われました。この時間を利用し、米の全量全袋検査をパンフレットが配布し、当農林事務所安達農業普及所職員から検査概要の説明と、福島の米の食味や天のつぶの魅力紹介などを行いました。

昼食時の全量全袋検査等説明の様子

続いて、田植えが行われるほ場へ移動し、伊藤部会長から田植えの説明が行われました。菅野常務理事はワラ蓑（みの）を身にまとい、昔ながらの田植えの風景を伝えました。初めて田んぼに入った子どもたちは、泥の感触を素肌で感じ歓声を上げ、慣れない田植え作業を楽しんでいました。

田植えの終了間際に通り雨に見舞われ、作業は予定より早く終了しましたが、ツアー参加者たちはこれから向かう岳温泉や、翌日に予定されるアスパラガスの収穫体験に期待を膨らませている様子でした。

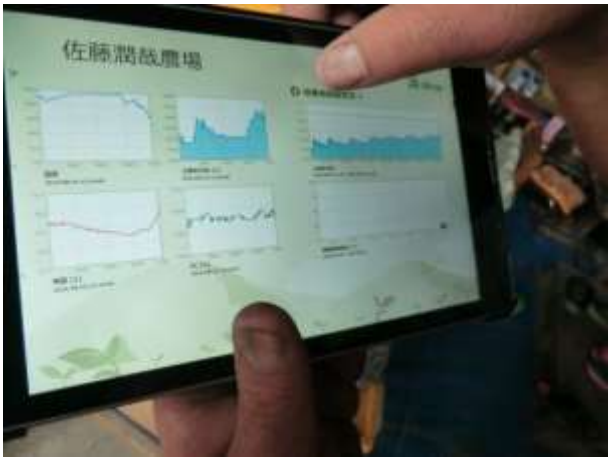
田植えをする参加者たち

（安達農業普及所）

◆「ICT 制御による養液土耕システムを活用したきゅうり栽培」実証ほで収穫開始！

昨年度、伊達市梁川町の「ふくしまから　はじめよう。攻めの農業技術革新事業」により設置されたきゅうり栽培実証ほにおいて、きゅうりの収穫が始まりました。本実証ほは、きゅうり栽培にＩＣＴ制御（インフォメーション・ アンド・コミュニケーション・テクノロジー）による養液土耕システムを導入したもので、今年度が実証２年目となります。

本システムでは、日射量や土壌水分量に応じてかん水・施肥の自動管理が行われるほか、データがインターネット上のクラウドで集約・管理されるため、離れた場所でのほ場状態の把握や設定変更が可能です。また、保存データを次年度や他のほ場での栽培に活用することも可能です。



タブレット端末でほ場を管理

平成 28 年４月 10 日（日）に定植された半促成栽培では、昨年度の反省点を改善した結果、システムの能力が十分に発揮されていることから、現在まで順調に生育しており、収量も導入前より増加することが期待されます。

きゅうり栽培において、かん水・施肥は収量を左右する重要な技術です。従来は、経験と勘に頼った管理が中心でしたが、本システムが経験の少ない生産者の収量確保や担い手の規模拡大等に活かせるよう、今後も技術の実証と産地への普及を目指していきます。

定植後1か月で収穫

（伊達農業普及所）

ふくしまから　はじめよう。「食」と「ふるさと」新生運動県北地方推進本部の構成員活動紹介

福島県栄養士会県北支部　～命と健康を守るための活動を皆様とともに～

平成 27 度の福島県栄養士会県北支部の主な活動を紹介します。

平成 27 年９月 27 日（日）、福島市のＭＡＸふくしま４階Ａ・Ｏ・Ｚ（アオウゼ）において、「福島市の健康フェスタ 2015」が開催されました。このイベントは、福島市の健康づくり関係団体が連携して、市民の自主的な健康づくりの支援により健康寿命の延伸を目指すことを目的として開催されたものです。当日、当会は、福島県の食塩摂取量が他県と比較して多いことから、「おいしく減塩」をテーマに、減塩の食体験や栄養相談を実施しました。

また、平成 27 年 10 月 10 日（土）、楢葉町において、復興支援イベント「ふたばワールド」が開催されました。当会は、福島県医学会と共催でブースを設け、10 人の会員と活動をしてきました。当日は、「野菜 350g を実際に計ってみる」や「じょうずに御箸を使っての体験コーナー」などのイベントを実施しました。大勢の来場者が立ち寄って体験してくださいました。参加者からは「野菜を１日これくらい食べることが分かってよかった」、「箸をじょうずに使うことのむずかしさに気がついた」等の声を聞くことができました。

福島県医学会と共催

これからも直接、県民の皆様とふれあう場と機会を積極的に設けていくことで、「食」を通じた県民の皆様の健康づくりを支援してまいりたいと思いますので、よろしくお願いします。

「じょうずに御箸を使っての体験コーナー」

「野菜350gを実際に計ってみる」

福島県県北農林事務所　企画部　地域農林企画課
電話　024－535－0382　FAX　024－536－9590
ホームページ　https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36210a/
電子メール　　kikaku.af01@pref.fukushima.lg.jp